慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	謡曲と『万葉集』：世阿弥の受容の一端
Sub Title	The acceptance of "Manyosyu" in yokyoku (Playbooks of Noh)
Author	三村, 昌義(Mimura, Masayoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.188- 204
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集 目次のタイトル : 謡曲における『万葉集』の受容
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0188

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

謡曲と『万葉集』

――世阿弥の受容の一端――

三村　昌義

本稿は、謡曲に於ける『万葉集』の受容の在り方を考察しようとするものである。したがって、本来ならば、室町末期までに成立したと考えられる謡曲すべてに亙って、逐一、本説、引歌に至るまで、詳しく調査するのが当然のところであるが、今回は、シテ方五流の現行曲を中心に、世阿弥作と確定されている、もしくは世阿弥作の可能性の高い曲、また世阿弥伝書に曲名の見える曲を中心に取り上げ、そこから浮かび上がって来るいくつかの問題点を拾い上げてみることとする。

一

謡曲に於ける『万葉集』の受容の様相、またその背景にあった当時の『万葉集』の理解を端的に表しているのは、『草紙洗』であろう。内裏での御歌合の相手に小町が当たった黒主は、勝目がないと見て屋敷に忍び込み、小町が自作の「蒔かなくになにを種とて浮き草の　波のうねうね生ひ繁るらん」を一人詠ずるのを立ち聞きし、これを万葉の草紙

に入れ筆する。さてその当日、読み上げられた小町の歌を、黒主は盗作だと訴え出る。証歌があるやとの問に、黒主は懐から万葉の草紙を取り出す。

ワキ〈草子は万葉題は夏　水辺の草とは書きたれども　作者はたれとも存ぜぬなり　シテ〈それ万葉は奈良の天子の御宇　撰者は橘の諸兄　歌の数は七千首に及んで皆わらはが知らぬことはさむらはず　万葉といふ草子にあまた本の候ふかおぼつかなうこそ候へ

必死の弁明もかなわず、確かに万葉の草紙には小町の作と同じ歌があり、小町は満座の中で恥をかく。が、よくその草紙を見ると、その歌だけ行の次第も乱れていて、墨付きが違うことに小町は気が付く。そこで草紙を洗ってみることを願い出て、許された小町が洗ってみると、はたしてその歌だけ墨が流れ落ち、小町の疑いは晴れる。入れ筆したことが露見した黒主は自害せんとするが、小町のとりなしによって元の座に直り、小町は帝に所望されるままに、和歌の徳を讃えて、舞を舞う。

実に、他愛もない内容ではあるが、引用した箇所は、『万葉集』の成立に関して、どこかしら暗示的でもある。それはともかく、こういう内容に類することは、中世、広く流布していた種々の「古今注」にも見られる。つまり、右の箇所は、「古今注」に基づいて作られていて、それゆえに『万葉集』は橘諸兄の勅撰で、歌数七千首にも及ぶ大部の歌集であることを、誰もが疑わなかったことを示していよう。それが中世という時代の万葉の理解と享受であったわけである。すなわち、聖典とされた『古今集』よりもなお古い時代に成った、非常に尊ぶべき歌集ではあるが、その実、万葉

仮名であるために読みも難解で、かつ広く本文が流布していたわけでもないというのが、当時の『万葉集』であったに違いない。

その証拠の一つとして『古今集為家抄』を見てみよう。この一書は、すでに指摘されているように、為家の著作ではなく、二条家末流の人の手による偽書かとされている。大阪府立図書館蔵の写本の奥書には、「応永廿年亥巳五月」とあるので、補写された年代が分かるが、一応、その頃の成立と見てよさそうに思われる。さて、この本には「万葉云」「万葉に」とあって引用されている歌が約五十首ほどあるが、実際に『万葉集』に見られるのは五首のみで、他はいずれも万葉原歌は不明である。また、「阿麻社迦留　比奈尓伊都等世　周麻比都々…」（巻五　八八〇）の歌などは、「天下田舎丹五世旅寝天宮之手触忘礼丹気梨」という字の宛て方と訓になっていて、かなりいい加減な印象を拭えないが、それが当時の水準であったのである。

このように、『万葉集』を持ち出し、そこにありもしない歌が注釈に用いられたのは、権威付けのためにほかならなかっただろう。「万葉云」と言うと、納得せざるを得ないだけの価値は誰しも認めていながら、その実、未知の部分がひじょうに多かったのが、当時の『万葉集』だったのである。そういう『万葉集』に見当たらないのに、「万葉云」として引用されている歌を、「万葉擬歌」と名付けられたのは片桐洋一氏で、同氏の「中世万葉擬歌とその周辺」は、そういう歌がどうして作られて来たのかを、中世歌学における『万葉集』講釈の在り方と、その場における誤解から来ていることを具体例を挙げて解かれ、中世の万葉研究は、万葉歌語研究であったと結論付けられたのは卓見であった。(1)

話を謡曲に戻そう。『草紙洗』がそうであったように、謡曲の多くは中世の古典注釈書に記載された説話類を本説としている。「古今注」「伊勢注」「日本紀注」「朗詠注」などがそれである。ここでは、『松虫』を例に挙げる。二人の男

の友情と友を偲ぶ懐旧の遊舞を主題としたこの曲は、「松虫の音に友を偲び」という『古今集』仮名序の一節に対して説かれた、『古今和歌集聞書三流抄』の説話、すなわち、

松虫ノ音ニ友ヲ忍ブトハ、昔、大和国ニ有ケルモノ、二人互ニ契リ深シ。津ノ国安倍野ノ市ヘ連テ行。市ニテ別レテ、アキナヒスル程ニ、互ニ行方ヲ不知。一人先立チ帰ケルガ、彼ヲ待テ居タリケル程ニ、夜ニ入テカレハ死ケリ。彼市ニ残ル友、彼ヲ待ケレドモ、見エザリケレバ、広キ野ニ出テ尋行ヌ。彼死シタル者ノ家ハ貧シクシテ、草深シ。松虫多ク啼ケレバ、松虫多ク啼処ヲ見レバ、彼者死テアリ。倶ニ一処ニテ死ナント契リシカバ、身ヲ抛テ死ス。夫ヨリシテ、友ヲ忍ビ、友ヲ恋ルコトニハ、松虫ノ音ニヨソヘテ云ナリ。

に基づいている。この『三流抄』への依拠の具合、文脈や詞章の上の特徴などから、この曲は金春禅竹作かと推定されているが、この作品には、『万葉集』にかかわるところが二点ある。一つは、冒頭部のワキの［名ノリ］

これは津の国阿倍野のあたりに住まひ仕る者にて候　われ阿倍野の市に出でて酒を売り候ふところに…

と、シテ・ツレの出の同吟の［サシ］の一節

立ち連れ行くや色々の　みのしろ衣日も出でて　阿倍の市路に出づるなり

の部分である。『松虫』には右の他にも、「阿倍野」「阿倍野の原」「阿倍野の松原」などとあるが、「阿倍の市」は、もともとは、万葉歌「焼津辺にわがゆきしかば駿河なる阿倍の市道にあひし児らはも」（巻三　二八四）による駿河の歌枕である。これを『三流抄』が摂津国の阿倍野と解しているのを、『松虫』はそのまま引用しているわけである。二つ目は、右に続く［掛ケ合］の

わが宿は菊売る市にあらねども　四門の門辺に人騒ぐと　詠みしも古人の心なるべし

の部分である。ここは、さきほど挙げた『古今集為家抄』、また『冷泉家流伊勢物語抄』ともに「万葉云」として、「我宿ハ菊売市爾阿羅祢登毛四方之門辺ニ人騒也」などと記載されているものを引歌としている。(2) もちろん、この歌は万葉擬歌である。このように見てゆくと、おそらく禅竹は、引歌の原歌が万葉歌であることも、実は『万葉集』にはそんな歌はないことも知らず、ただ古典注釈書に引用されているのを忠実に利用しただけに過ぎなかったのではないかと思われるし、仮に知っていたとしても、ことさら『万葉集』ということをどの程度意識していたかになると、心もとないように思われる。それは禅竹が悪いのではなく、当時の万葉の理解度、また流布の程度から言えば、当然のことだったと言わねばならないだろう。

しかし、謡曲の作者たちが、全く『万葉集』を知らなかったというわけでもないことは、謡曲本文に、「万葉」という語が登場することからも察しが付く。以下、この点をもう少し考えてみる。

二

現行曲で「万葉集」という語が登場するのは、先述の『草紙洗』の他には、『高砂』『船橋』『三山』の三曲である。このうち世阿弥作の『高砂』の、「高砂といふは上代の　万葉集のいにしへの義　住吉と申すは　今この御代に住み給ふ延喜のおん事　松とは尽きぬ言の葉の　栄へは古今相同じと　御代を崇むる譬へなり」の部分は、高砂を『万葉集』に、住吉を『古今集』になぞらえて、歌道と御代の栄えが一体であることを説いているわけだが、これはやはり『三流抄』に見える所説そのままで、世阿弥の歌道の知識の多くは、『三流抄』に基づいていることはすでに指摘されている。また、話がたまたま『万葉集』に及んだに過ぎないのは『草紙洗』と同じで、万葉歌と直接のかかわりがあるわけではない。それに比べて『船橋』と『三山』は、前者は「上つ毛野の佐野の舟橋とり放し親は放くれど吾は離るがへ」（巻十四　三四二〇）、後者は中大兄の三山の妻争いの歌（巻一　一三・一四）、及び桜児、蘰児の歌（巻十六　三七八六～三七九〇）に直接かかわっていると、一応はみることができる。

『船橋』は、古能を田楽がレパートリーとして取り入れていたのを、世阿弥が改作したものであることが『申楽談儀』の記事によって明らかで、同書は「世子作」とも記しているから、改作とは言うものの、構想、詞章ともに全面的に世阿弥の手が加わっていることは言うまでもない。ここには確かに、シテ・ワキの［問答］の二か所に、

さてこの橋はいつの御宇より渡されたる橋にて候ふぞ　万葉集の歌に　東路の佐野の舟橋とりはなしと詠める歌の心を知ろしめし候はずや

さてさて万葉集の歌に　東路の佐野の舟橋取り放し　または鳥は無しと二流に詠まれたるは　いづれが本説にて候ふぞ

と『万葉集』という書名が見え、後シテの［上ノ詠］には、万葉歌を「東路の　佐野の舟橋とりはなし　親し離くれば妹に逢はぬかも」という形で引いている。三四二〇の万葉歌は、仙覚の『万葉集抄』以下、中世の万葉関係の著作には、すべて末句を「離くるがへ」とし、『古今六帖』『後撰集』以来、この万葉歌を本歌としたものは数多い。[3] それらの歌の多くに共通していることは、いずれも説話的な背景を持って「佐野の舟橋」が詠まれているという点である。謡曲作者の知識の源の一つとなったかと考えられる連歌書『詞林采葉抄』はこの歌に関して、

トリハナシトハ此橋ヲハ河ニハ渡サル、ニヤ。路ノ両方水田ニテ、板ヲウチ渡シ〳〵スルトカヤ。然レハ水ナキ時ハトリハナチテヲクト申ス。同巻歌云

クルシクモフリクル雨カミワカサキサノ、渡ニイエモアラナクニ

と注し、同じく『青葉丹花抄』は、

此橋は河には渡さす。両方は田にて中に細道のあるか、田より水の入は板を打渡〳〵て、水の入さる時は取放也。

それかことく女のおやにしられぬ夫したりとてはなせともなをさけらぬなり。

と記している。この歌を巡っては、何らかの形の説話が生じていたらしい。南北朝頃には成立していたとされる『新撰歌枕名寄』には、万葉歌として『船橋』と同じ形でこの歌を引き、また明応六年成立の歌学書『釣船』は、「東路の佐野の舟橋取はなし親しさけずは妹にあはんかも」と形は少し異なるが、

是は、昔、上野の国佐野の舟橋と云ふ橋有りけり。その橋のわたりに住む者有りけり。河の向ひなる女のもとへ通ふを、親の心に詮なしと思ひて、橋の板を四五枚とりはなしたりけるを知らで、月を眺めてわたるとて、踏みはづして落ちて死にけり。その事を、後に、親にさけられて、女にえ逢はぬ者、かく詠めるとぞ申し伝へ侍る。

という記事を引く。[4]『船橋』は右の類話に基づいていることは明らかで、当時、この万葉歌の「とりはなし」は、取り離しと解するのが正当だったことが分かる。「鳥は無し」のほうは謡曲には触れられていないが、『藻塩草』には、「佐野舟橋　上野　鳥はなし」と見え、[5]また『寛永十三年大蔵虎時本』の間狂言には、行方不明の水死体を発見する時の方法として広く行われていた、鶏を船に乗せる民俗に基づいた、

責テ死骸ヲ成トモ、今一目見申度トテ、色々険シ申セドモ更ニ見ヘ不申候間、有人ノ申事ニハ、死骸ノ不見尋ヌルニハ、鶏ヲ船ニ乗セテ漕廻レバ、必ズ死骸ノ上ニテ鳥ガ鳴クト申タル程ニ、去ラバ鶏ヲ取寄セヨト申候ヘドモ、此

ノ佐野ノ領ニ、中丶鶏ガ無ク候間、爰以御歌ニモ、東路ノ佐野ノ船橋鳥ハ無シトモ、又橋ヲ取離シタルニ依テ、取離シトモ、読被申候。

という話が載せられている。[6] これの文献的な典拠は未詳だが、これらを参看すれば、中世、「鳥は無し」と解する説も存在していて、行われていたのであろう。それを世阿弥は「二流に詠まれた」と脚色したにちがいない。

しかし、『船橋』も、典拠が『万葉集』にある歌だという自覚は世阿弥にもあるものの、実は中世的に歌型を変えた万葉歌とそれにまつわる和歌説話に基づいていることは明らかで、やはり『万葉集』から直接作られた曲とは言えないようである。

が、世阿弥は『船橋』は万葉歌が典拠だということを意識していたものか、三四二〇番歌の他に、前シテとツレの出の［サシ］「往時渺茫として何事も　見残す夢の浮橋に　なほ数添へて舟競ふ　堀江の川の水際に　寄辺定めぬ徒波の」に、「舟競ふ堀江の川の水際に来居つつ無鳴くは都鳥かも」（巻二十　四四六二）を引いているほか、古写本や下掛りでは、ワキの［着キゼリフ］が、一般的には「〇〇に着きて候　このところに宿を借らばやと存じ候」などとあるべきところを、「佐野のわたりに着きて候　このところに暫く休らはばやと存じ候」となっているのは、仮にこの本文のほうが世阿弥の原作に近いと考えるならば、「苦しくも降り来る雨か三輪の崎佐野の渡に家もあらなくに」（巻三　二六五）を踏まえて、家がないので宿りはできないから、休らうとして来たものかとも考えられる。但し、四四六二番歌は仙覚の『万葉集抄』以下、『青葉丹花抄』『万葉集抄』などに引かれ、佐野のわたりに家がないというのは、『八雲御抄』に「佐野の渡は家なしと万葉にもいへり」とあり、知識の源は、歌学書、連歌書にあるようである。

三

次に『三山』を考えてみよう。この曲は、『親元日記』などに寛正六年三月九日の将軍院参の折に観世によって演じられたことが見えるので、少なくともそれ以前にはあった曲ということになる。『能本作者註文』以下の作者付には、すべて世阿弥作としているが、構想はともかく、［クセ］の詞章に彼らしくない点が多く、作者不明とすべき曲であろう。あまり上演されなかったものか、古記録に見えるのは右の一回のみで、[7] 古写本も少ないし、現在も宝生、金剛の二流にのみ伝わり、観世では昭和六十年に、ワキの存在、性格が不統一な形の改作によって復曲された。

万葉研究としては、一三・一四番歌は、大和三山のどれを男女いずれと考えるか、また「雄男志等」を「を愛しと」と解するか「雄々し」と解するかが大切なことだろうが、『三山』では香久山を男、畝傍、耳成を女とする、一男二女の物語となっている。すなわち、大和耳成のほとりを訪れた良忍上人の前に里女があらわれ、柏手の公成という男が、耳成の桂子、畝傍の桜子の二人に通っていたが、次第に桜子に気が移り、桂子のほうへは通わなくなってしまった。それを悲しんだ桂子は耳成の池に身を投げたという昔語りをし、姿を消してしまう。良忍の弔いの前に姿を現した桂子の霊は、桜子の霊を後妻打ちに合わせるが、やがて仏果を得て、両人ともに消え去ってしまうのである。一曲の見せ場は、後場の桂の小枝と桜の小枝を持った二人が争う後妻打ちの箇所で、ここは三山の伝説をもとにした作者の創作と思われるから、さしあたって『万葉集』とは直接にはつながるまい。問題は前半の、三山を一男二女と脚色して来たこと、そして身投げをした耳成の女と三七八九番歌以下三首とを、どのように結び付けたのかという点である。

まず後者の問題から考えてみると、『三山』は三七八九番歌の前にある題詞を踏まえて、「耳成の池し恨めし吾妹子が

来つつ潜かば水は涸れなむ」の耳成と蘰児の結び付きから、桜子を香久山に関係させて、一曲に仕立て上げているように思われる。が、蘰児、桜児の物語は、実は『紫明抄』に、「蜻蛉」の「昔は懸想する人のありさまのいづれとなきに、思ひわびてだにこそ身を投ぐるためしもありけれ」の部分の注として、『大和物語』の生田川の歌と、『万葉集』の桜児の題詞と歌とを引いている。[8] また、『歌林良材抄』にも、「桜児事」「蘰児事」として、それぞれ歌を挙げ、題詞を要約しているのである。こういう注釈の存在を勘案すると、『三山』の作者は、全くの創作として耳成と蘰児の物語を結び付けたのではなく、当時の共通理解の基盤に沿って、筋を展開させたものと見ていいだろう。

それでは、三山を一男二女として来たのは作者の創作だったのだろうか。そもそも一三番歌は、仙覚の『万葉集抄』によると、古点では「タカヤマハ、クモネヒヲヽシト」と訓まれていたらしいが、これでは何のことか分からない。仙覚が初めて「高山波雲根火雄男志等（カクヤマハウネヒヲヲシト）」と訓み、その注として、香久山を女、畝傍と耳成を男とする二男一女の物語、すなわち耳成が香久山に懸想していたところへ、後に畝傍も香久山に懸想し、香久山が畝傍に心変わりしたために、耳成と畝傍が争ったという話を載せている。これは訓詁注釈というより、その当時存在していた物語、伝承の紹介と言っていいだろう。あるいは仙覚は、こういう物語、伝承から、新たにこの歌の訓を定めたのかもしれない。

『青葉丹花抄』では、一四番歌の注として、「香山と耳梨山ととはりせしを、うねび山は夫（オトコ）にて立てみたりし也」と記している。ここでは、耳成と畝傍は男で、香久山は女と理解されているのであろう。また『新撰歌枕名寄』の「耳成山」のところには、「耳なしの池も恨めし」の歌に続けて、「耳なしともとり山の中にゐて立聞するは天のかく山」という一首を挙げている。[9] 第二句のあたりは誤写らしく、「夫木」と書かれてはいるが、この歌は『夫木集』には見当たらない。ここでは、香久山を男と考えているようにも思えるが、はっきりしない。ともかく、これらも三山に関する伝

承であることは間違いない。

このように見て来ると、『船橋』が典拠としている「取り離し」と「鳥は無し」の二流と同様に、『万葉集』そのものからは離れた伝承として、三山にまつわる二男一女の物語、一男二女の物語、両説存在していたと想像してみることは不可能ではなく、『三山』の作者はそのうちの一男二女説を採って来たのではないだろうか。シテの「総じてこの山は万葉第一に出されたる三山の一つなり　耳無山ともみなし山とも」とか、ワキの「げにげに万葉集に曰く　大和の国に三山あり　香山は夫畝傍耳無山は女なり　これに依つて三にあらそふと書けり」などの［問答］は、当時行われた万葉歌の講釈そのものに基づいているような感さえある。さらに言えば、三山のある場所は、観世をはじめ大和申楽発祥の地でもあり、そこでは三山を一男二女とする伝承が伝わっていて、『三山』はそれを下敷にしている可能性も考えてみなくてはなるまい。そうでなければ、二男一女の物語を、一男二女の物語に潤色して来ることには、無理が感じられたにちがいない。

このように考えると、我々から見ると『三山』は、万葉歌にまつわる伝承を組み合わせて作られた曲ということになるが、作者の意識からすれば、万葉そのものを典拠とした、本説正しい曲と考えていたことと思われる。

四

『古今集』以下の勅撰集などに比べると、万葉歌からの引歌は、謡曲には数はそう多くはない。それは『万葉集』そのものが流布していなかったから当然のことで、他の歌集や古典注釈に引用されたものからの孫引きのような形のものが多く、万葉歌とも知らずに用いられていることが多いのも、見て来たとおりである。が、一方で、未知の部分が多い

だけに、『万葉集』への興味もあったものとも考えられるのは、『船橋』『三山』の例を見れば分かるだろう。

『申楽談儀』には『石河の女郎』という曲名も見える。全くの散佚曲であるが、世阿弥の期待の長男であった元雅の作で、同じく散佚した『恋の立合』の一節、「恨みも末も通らねば」を転用した文句があったことだけが分かっている。万葉歌人、石川郎女をシテとする曲であったことは想像に難くない。石川の郎女の名は『万葉集』には何カ所かに見え、数人以上の存在が確認できるが、どれとどれを同一人物と見るかは説が分かれている。おそらく、当時も同じようなことが問題とされ、早くにそれにまつわる恋の妄執の物語が生まれていて、それを素材とした曲が『石河の女郎』ではなかったかと想像される。[10] これも『三山』と同様に、万葉歌にまつわる伝承をもとにした曲であったに相違ないが、元雅にとっては『万葉集』に依拠した自信作であったかと考えられる。

さて、世阿弥らは義満、良基などのサロンと深くかかわり、その教養、知識もそのあたりから来ていることは明らかで、そういう環境のもと、彼が万葉の講釈をも見聞していたことを想像してみるのは、あり得ないことではあるまい。以下は、その可能性を断片的なことから、いくつか拾ってみたいと思う。

『花筐』は、［サシ］［クセ］の部分は観阿弥作の謡物「李夫人」の曲舞を取り入れたものだが、『五音』上に作曲者名なしに掲げてあることから、世阿弥作であることが確認できる。越前、味真野に住んでいた大迹部皇子は皇位継承者と決まり、照日前に文と花篭を届け都へ向かい、大和玉穂宮を皇居とする。そこへ皇子の文と形見をもった照日前が狂女となって尋ねて来て、無事皇子と再会を果たすという筋の本曲は、典型的な物狂能ながら、どこか牧歌的な感じさえするが、室町時代の上演記録はほとんどなく、天文十三年正月十六日、石山本願寺で催されたことが知られるのみである。[11] この曲は、継体天皇の即位を扱っているものの、直接には『記紀』とは無関係で、『神皇正統記』による理解で

はないかと思われる。それはともかく、即位以前の恋人が、恋慕のあまり狂乱し、花筐ゆえに再会を果たすという構想のもとにあるのは、「安治麻野に宿れる君が帰り来む時の迎へを何時とか待たむ」（巻十五　三七七〇）の万葉歌と、古今歌「花がたみめならぶ人のあまたあれば忘られぬらむ数ならぬ身は」をはじめとする『古今六帖』の「服飾（かたみ）」にある歌群である。[12] 前者は都へ上った君の迎えを待ちかねている心情、後者は数ならぬ身ながらも再会を果たすために花筐を離さぬ心情のモチーフになっていると考えられる。世阿弥は『三流抄』などを通じて、古今歌には親しんでいたと思われるが、三七七〇番の万葉歌は、『五代集歌枕』『謌枕名寄』などには見えるものの、中世の万葉関係の著作では『万葉集佳詞』に、歌の一部のみが記されているだけのようである。[13] 古典文学大系『謡曲集　上』は、継体の皇位継承とこの歌とを配した説話があったかと推測しているが、[14] おそらくそのようなものはなく、この曲はいわゆる「作り能」であろう。とすれば、世阿弥は「味真野」という作例の少ない歌枕の万葉歌をどこで知り得たのか、大部の『万葉集』が彼の手元にあったとは考えにくい以上、彼が万葉の講釈を聞書きしたという可能性は捨て切れまい。

『多度津左衛門』は、世阿弥の自筆本が残されている。が、彼の他の著作にはどこにも本曲に触れるところはなく、上演された形跡もない。讃岐国多度津左衛門の娘と乳母が、遁世した父を高野山へ尋ね行き、曲舞を所望されて舞う中に狂乱し、寺中へ入ろうとするのを僧に打擲される。二人の愁嘆の言葉から、打擲した僧はわが子と気づき、親子は再会するという筋の物狂能である。この曲の後シテと子方の出の［サシ］に、

夕月も通ふ天路もいつしかと　仰ぎて頼む月人男

とある。[15] これは「夕星もかよふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人をとこ」（巻十　二〇一〇）によっている。「夕星」を「夕月」に変えたのは、この文句の前のシテ謡に「久方の月の桂の男山　さやけき影は所から」とあるので、「月」で統一したと同時に、「影」と言えば「月」という付合に合わせたのであろう。この歌は『古今六帖』『夫木集』『赤人集』などにも見えるが、中世万葉関係書では、兼載の講義を桑下叟（兼純）が老年になって書き付けたものとされる『万葉集之歌百首聞書』[16] に、

ゆふつゝは夕の星也。これも七夕の歌也。月人おとこは月中ニあるかつら男の事也。たゝ月の事と心へ侍へし。歌のは、星も今夜あふ夜にて行かよふに、吾思ふ人をはいつまてまたんそと、月にうれへていへる心也。

とあるのが管見に入っただけである。成立は世阿弥よりは後のものではあるが、当時、このような講義がなされていたわけで、世阿弥が同様のものを聞いた可能性は考えられるだろう。そうだとすれば、恋の思いを父に対する娘の思いに、巧みに転用して来たと考えていいだろう。また、「天路」という語は、『加茂』『白髭』『西王母』などにも見られ、万葉歌語なのか「雲路」からの転化か不明とされているが、[17] 右の用例だけでは断じ難いものの、世阿弥が使い始めた万葉歌語から、広まったのではないかとも思われる。

謡曲に於ける『万葉集』の受容という問題はあまりにも大きい。世阿弥作とおぼしき曲だけに引かれる万葉歌は他にも多いことは、世阿弥独自の『万葉集』の受容があったことの証左のようにも思われる。本説に関しては、世阿弥作の

廃曲『松浦』と『秘府本万葉集抄』との関連、また「わが恋は千引の石を七ばかり頸にかけむも神のまにまに」（巻四七四三）と廃曲『千引』『長柄』との関連、及び世阿弥の関与の可能性など、いくつも問題点は拾うことができ、それらは別稿に譲りたい。引歌に関しては、なおなお精査しなければならないし、受容という間口を広げれば、いわゆる万葉擬歌を引歌とした可能性も精査する必要がある。拙稿はそれらの問題点の入口をなぞったのみである。

注

（1）片桐洋一「中世万葉擬歌とその周辺」「萬葉」第一二六号。

（2）『冷泉家流伊勢物語抄』は「我宿者菊うる市爾阿良禰登茂四門野門辺爾人左和具南里」の形で引用。

（3）「東路の佐野の舟橋はじめより思ふ心あり厭ひすな君」（『古今六帖』）「東路の佐野の舟橋かけてのみ思ひわたるを知る人のなき」（『後撰集』恋二 源等）など。

（4）新潮日本古典集成『謡曲集 下』（伊藤正義 校注）四七六頁。

（5）注（4）に同じ。

（6）岩波古典文学大系『謡曲集 上』（横道萬理男 表章校注）四三六頁。

（7）『能楽源流考』所収の「演能曲目考」による。

（8）島津忠夫『能と連歌』七九頁。

（9）注（8）と同書、九七頁。

（10）『青葉丹花抄』に、一二五・一二六番歌とその左注について、「石河の乙女と云かうしよくの女のとなりに、又好色の男有。夜るよはひに男の方へ行て、下女の火とらんとするよしいひけれは、読てつかはしけり」などとある。

（11）注（7）に同じ。

（12）注（4）と同書、四五八頁。

（13）渋谷虎雄『古文献所収 万葉和歌集成』によるところが大きい。

(14) 同書、三四九頁注一。
(15) 表章監修 月曜会編『世阿弥自筆能本集』による。
(16) 佐佐木信綱編『萬葉学叢刊 中世編』所収。
(17) 注(4)と同書、三五四頁、注九。